

して著者は先づ、土器片が何れも焼成良好ならざる粗雑な尖底のち古式繩紋土器たるを指摘してゐるが、更に山内清男氏の早く注意した關東並びに東北地方の他の古式繩紋式土器との間に於ける型式的併行關係を肯定して、其の位置を確めるに意を用いた。即ち近くの東北地方では榎木貝塚出土の土器類中、貝塚下の黒土層からは纖維を含まぬ無繩紋の細隆起線文、貝刺刺文を有する土器が出ており、上層の貝塚からは、この素山貝塚の第二類の土器が出土してゐる事實、而して山内氏が前者を榎木下層式、後者を榎木上層式と名付けたものを取り上げて、素山貝塚の第三類の土器即ち沈線文土器が、この榎木下層式に並行し第一、第二類の條痕並に繩紋條痕土器が同上層式に併行する事を論じた。次に更に進んで前者が關東の田戸下層式或は子母口式に併行し、一方北海道住吉町出土の尖底底土器に併行する事を實例に就いて指摘してゐる。かくて氏は素山貝塚出土の土器の大部分をむすものは關東の繩土器なる茅山式に併行する事を認めたと、關東の茅山式では未だ繩紋が施されざつてゐない事から繩紋の發生を東北地方に求むべきではないかとの一の私案を提出してゐる。

まことにこれら古式繩紋土器群の併行關係は獨り型體的に或は層序的に認められるにとゞまらず、ある古い歴史的時間の内に於ける空間的併行關係を指示するものたる事にほゞ疑ひの餘地はないであらう。これらのある一定の時間内に於いて、かゝる貝塚が異つた空間を占有し乍ら、夫々如何なる文化史的交渉を持ち得たかは、將來この種の科學的調査報告のより多くの發表を俟つて明

かにさる可きである。

因みに本書では問題としての土器類をば四十葉に上る鮮明なコロタイプ版で示し、なほ附するに榎木貝塚その他の同様の土器を以てしてゐる點は研究上基礎的な資料を提供する用意を示したものととして推賞す可きである。(四六倍版、本文三三頁、圖版四二葉、佛文概要一〇頁、東北帝國大學法文學部與羽史料調查部發行昭和十五年三月、定價五四)(藤岡謙二郎)

## 彙報

### 史學研究會

例會 五月十八日(土)午後一時半より文學部陳列館第一教室に於いて開催、左の講演があつた。

一、遼代帝后陵の壁畫を通じて見たる契丹人生活の一面

本學講師 田村實造氏

遼代帝后陵とは、滿洲國興安西省巴林左翼旗と内蒙ウジュメチンとの境をなす興安嶺の一峯ワール・イン・マンハに現存する聖宗・興宗・道宗の三陵墓(俗に方位の上から東陵中陵西陵といふ)をさすものであるが、そのうち、東陵の内部一面に描かれてゐる人物四季山水・花鳥文などの壁畫を通じてうかがはれる契丹人の生活様式——王としてこれらの住居・生業・固有信仰などを中心とする——を、遼史はじめ、當時の宋人の諸記録中にみえるそれ

に關する記載との同似性に於て考察し、且つ併せて數多の壁畫寶物大の寫眞の展觀を行つた。

一、藤原宮跡の發掘に就いて 工學博士 足立 康氏

博士が主として行はれた日本古文化研究所の奈良縣高市郡鴨公村藤原宮跡發掘に就いて最近の概況を報告し平城官との比較を試みられたなほ詳細については調査完了の後の發表を俟つこと大なるものがある。

### 讀史會

新入會員歡迎會 五月七日(火)午後六時より南禪寺塔頭正因庵にて新入會員たる國史專攻二回生の歡迎會を開催。西田教授、牧教授、柴山講師、東伏見講師以下先輩、學生三十餘名出席し、庵主古溪景雄禪師の心を籠めた御もてなしを享けつゝ、意義深い一夜を過した。

### 東洋史談話會

新專攻生歡迎會 五月十一日(土)午後五時半より榮友會館に於て開催、新專攻生、宮崎助教以下卒業生、三回生出席、會食後自己紹介を行ひ、宮崎助教を始め卒業生よりは種々研究上の注意などあり、今學年最初の會合を一層有意義ならしめた。

### 東方文化研究所學術公開講演

東方文化研究所に於ては、今學期に入り、左記公開講演を行つた。會場はすべて同所講堂。

五月十一日(土)午後一時半より

新修本草と狩谷棊齋

五月二十五日(土)午後一時半より

植物の漢名について

臨鏡論を通して見たる漢代の社會

唐代の官制

六月一日(土)午後一時半より

周初の金文について

夏小正について

六月十五日(土)午後一時半より

朱子の理と氣

龍門石窟にあらはれたる佛教

研究員 森 鹿三

研究員 木村 康一

研究員 宇都宮 清吉

研究員 内藤 乾吉

研究員 小川 茂樹

研究員 能田 忠亮

研究員 安田 二郎

研究員 塚本 善隆

### 西洋史讀書會

例會 昭和十五年度第一回例會を五月十一日、前川講師及び二回生歡迎會を兼ねて開催。原教授、村田、井上、前川の三講師を始め參會者二十五名。

一、クリート文化とクリート美術 村田數之亮氏

### 地理學談話會

例會 五月十一日(土)午後二時半より實習室にて開催。出席者二十六名。

一、新井白石の地理思想 西田 和夫君

一、英吉利國民性の民族的基礎 朝永陽二郎氏  
六月七日(金)午後三時半より實習室にて開催。出席者二十四名

一、西南アジアの人類 岡本信太郎君  
二、國土計畫と交通(豫報) 川上喜代四氏

二回生歓迎會 五月四日(土)午後六時半より樂友會館にて開催  
小牧教授他二十四名出席、簡單の食事の後、至つて和やかな雰囲気の中に、打ちつけた自己紹介が行はれた。

地理學教室春季旅行 五月二十日二十一日の兩日に互り、小牧教授、室賀講師、野間助手、柴山、川上副手及三回生一同信樂、伊賀上野地方に見學旅行を行ふ。信樂では信樂焼に關して詳細なる話を聞き、益する所が多かつた。雜草生茂る信樂宮址は感慨深いものがあつた。上野では、テラコッタが大學の玄關に使用されて居る事を知り、みのむし庵にばせを、偲び、服部、印代の聚落を見學、一の宮政國神社に參拜して、木津經由で歸つて來た。

宇治茶見學 六月三日(月)午後一時より柴山川上副手及二、三回生有志は宇治茶業研究所、小山商店を見學、宇治茶に關する認識を深めた。(以上川上記)

### 考古學談話會

考古學談話會では新學期に入つて、四月二十九日夜烏初にて、新任の村田講師、新入選科學生、川勝、内藤三氏の歡迎に大學院學生今井氏の除隊の祝賀をも兼ねて開催、梅原教授はじめ集るもの十數名懇親を重ねる處あつた。

また會では文學部學友會の下呂旅行を機會とし、梅原教授をはじめ教室員數名は五月二十四・五・六の三日にわたり美濃・飛騨方面に見學旅行を行つた。美濃では坂祝村の史蹟稻葉火塚古墳(方墳)を實査し、飛騨では關府村の廣瀨古墳・國分寺址等を訪ね、奈良時代瓦繪のある光壽庵遺瓦をはじめとし、高山町の江馬修氏・神通寺等に藏せらるる石器時代遺物を一覽し、尚、歸途、美濃大田町に林魁一氏を訪ふて珍藏の御物石器、多數の銅鐸をはじめ、古墳出土品を參觀した。

## 會報

### ◇會員動靜

#### ◇入會

- 京都市上京區紫竹梅ノ木町六二 羽田 明氏 (外山軍治氏紹介)
- 兵庫縣川邊郡立花村塚口九〇四 守田 長兵衛氏
- 京都市左京區聖護院川原町二五 上總方 平松 令三氏
- 京都市左京區鹿ヶ谷法然院町二七 岡方 鈴木 恒生氏
- 京都市左京區北白川葛町五 大杉 正夫氏
- 大阪市住吉區播磨町東一丁目三七 本庄 宗正氏
- 京都市左京區北白川別當町五四ノ二 中島方 織田 昭磨氏

京都市上京區小山上花ノ木町一七

京都市左京區北白川別當町五〇 東方

京都市左京區修學院石掛町三一 佐土原方

京都市左京區北白川下池田町七三 内田方

京都市左京區淨土寺南田町四九 南川方

大坂市住吉區萬代町西四ノ七

京都市左京區淨土寺真如町三三迎福寺内

京都市左京區淨土寺西田町一〇

京都市左京區田中飛鳥井町一八 大村方

京都市左京區吉田中大路町三三ノ三八 船木方

京都市左京區下鴨申川原町八四

仙臺市北四番丁一三六

奉天市大和區千代田通四〇郵政官舎内

◇轉居

東京市板橋區板橋町六丁目三四四二

梅原隆章氏 定本眞一氏 兼岩正夫氏 北川三郎氏 南原五郎氏 松井迪夫氏 和田邦平氏 山口格太郎氏 眞坂忠之氏 有坂隆道氏 植村雅彦氏 藤井清氏 (鶴淵一氏紹介) 島谷正亮氏 安藤正次氏

◇寄贈交換圖書目錄 (六月現在)

基督教史研究 第七册

無 關 之 三・八・三九・四〇

今泉忠義著 國語の力とその本質

德永孝一著 鮮滿に於ける前方後圓形

歴史と國文學 二二ノ四・五・六

基督教史研究會 基督教史研究會 國學院大學圖書館 著者 太 洋 社

蒙 古 一三・二四・一五 善 隣 協 會 中國文學 六〇 中國文學研究會 斯道文庫報 紀元二千六百年記念號 斯 道 文 庫 宮崎市定著素朴主義の民族と文明主義の社會 富 山 房 内田吟風著 古代の蒙古 同 古 學 叢 刊 第七期 北 京 古 學 院 唐招提寺の新研究 鶴 故 鄉 舍 東方學報 東京一一ノ一 東方文化學院 史 學 雜 誌 五一ノ四・五・六 史 學 會 歷史地理 七五ノ四・五・六 日 本 歷 史 地 理 學 會 社會經濟史學 九ノ一・一・二 一〇ノ一・二 社會經濟史學會 史 苑 一三ノ三 立 教 大 學 史 學 會 史 學 研 究 一一ノ三・四 廣 島 史 學 研 究 會 人類學雜誌 五五ノ三・四・五 東 京 人 類 學 會 考古學雜誌 三〇ノ三・四・五 考 古 學 會 文 化 七ノ三・四・五 東 北 帝 大 文 化 會 國學院雜誌 四六ノ三・四・五 國 學 院 大 學 史 迹 與 美 術 一一ノ三・四・五・六 史 迹 ・ 美 術 同 致 會 社會學徒 一四ノ三・四・五 社 會 學 徒 社 國 史 學 三九・四〇 國 史 學 會 和 紙 研 究 五 一八ノ四 和 紙 研 究 會 史 一八ノ四 三 田 史 學 會

史 淵 二三  
國民精神文化 六ノ三・四・五  
民族學研究 五ノ五・六 六ノ一

九 大 史 學 會  
國民精神文化研究所  
日本民族學會

東 洋 史 研 究 五ノ一・二・三  
軍 事 史 研 究 五ノ二  
哲 學 研 究 二五ノ三・四・五

東 洋 史 研 究 會  
軍 事 史 學 會  
京 都 哲 學 會